

敬神尊皇

護國青年會議
政治
結社

劍之會

黎

REIMEI

明

報恩感謝

発行人//小俣栄二
編集人//戸出蒼流
東京都国立市谷保 5900-7
第0004号 平成16年10月1日



支那の暴挙を許すな!!

東シナ海の日支境界線付近の海域で、支那が天然ガス採掘施設の建設に着手した。(左図参照) これは「はるか彼方の海上で起きたこと」ではなく「主権国家」としての我が国の存在を脅かす「有事」であり、同時に日本経済に与える影響は計り知れないものがある。

支那がプラントを建設している海底には、石油産出量世第二位のイラク油田にも匹敵する膨大な資源がねむっている。その埋蔵量は原油1000億バレル以上、天然ガス2000億m³以上と言われている。金額にして実に640兆円以上、つまり国民一人当たり500万円にも上るのである。日本がこの資源の採掘に着手した場合、経済効果は莫大なものがあり、懸案となっている雇用問題、不況問題等は一気に解消される。しかしながら日本政府は「我が国は資源に乏しい国である」と国民を欺き、この大事な資源を30年以上も放置し続けてきたのである。海底資源の大半が日本側にあるというのに政府は本格的な調査すら行わず、基礎的な資料しか持ち合わせていないのである。こんなことでは所有権を主張することすらできない。支那が本格的に採掘を始めれば、大事な資源が根こそぎ支那に持って行かれてしまう。国際常識では埋蔵量の割合に応じて配分を請求できることになっているが、国際常識など歯牙にもかけない国家である。配分などという淡い期待をせず直ちに本格的な調査と支那のプラントの目の前で日本独自の採掘を開始すべきである。

政府や担当官庁である外務省やエネルギー庁の役人どもは国益を何だと思っているのであろうか？ 特に両省庁の責任の擦り合いは目に余るものがある。エネルギー庁は「外務省が中間線を確定させないから採掘はできない」と言い、外務省は「エネルギー庁からの資源データの提出が無いから抗議することができない」と責任を転嫁するばかりである。日本側の海底に豊富な天然資源があることを知りながら、支那を刺激してはいけないとする政府は、地質構造を探る程度の基礎調査しか行わず、採掘を申請した企業には許可を与えず、只管事なかれ主義に徹してきたのである。そのツケが640兆円、つまり国民一人当たり500万円となって回ってきたのである。

両国の外相会談で、支那は共同開発を提案してきたが、断固受け入れてはならない。支那の狙いは日本の経済力であり、支那の本心は日本を利用するだけ利用しようということであり、このような悪魔の誘惑には決して乗ってはならない。政府は支那の盗っ人行為を「国家主権の危機」と捉え、支那に対して厳重に抗議するとともに早急に日本独自の採掘を開始すべきである。我々はこの膨大な資源が、支那に根こそぎ盗まれることを、指を咥えて眺めていられるほどお人好しではない。

編集人・戸出蒼流



連載 吉田松陰- 安政5年、29歳の松陰は再び獄に繋がる身となった。翌年江戸送りとなり、同年10月獄舎にて刑死、享年30歳であった。同じ年に橋本左内梅田雲浜ら多数の志士も刑死、世に安政の大獄といわれた。

東京工業大学の前身、東京職工大学の初代学長となった正木退蔵は13歳の時に松下村塾に学んだ。明治12年、正木は「宝島」の作者スティブンスンに会って松陰のことを話した。後にスティブンスンは「吉田寅次郎」という一文を草し、それを次のように結んだ。

「今や我々の周りに奇妙な西洋風をした貪婪な研究者を見る時、彼らの祖国が、この『吉田寅次郎』に大きな恩恵を受けたことを忘れてはならない。」

身はたとひ 武蔵の野辺に 朽ちぬとも

留めおかまし 大和魂

吉田松陰著・留魂録